



令和4年度 福島県文化財センター白河館
第3回館長講演会

**国宝「漢委奴國王」
金印の考古学**

公益財団法人福島県文化振興財団副理事長
兼 福島県文化財センター白河館長

石川 日出志



福岡市博物館所蔵

2022年12月4日（日）

とうほう・みんなの文化センター 小ホール

石川日出志館長のプロフィール

出 身 昭和 29(1954)年生まれ 67 才
新潟県出身

略 歴 明治大学文学部考古学科卒業
同大学大学院文学研究科博士課程中退 文学修士
現在、明治大学文学部専任教授
福島県文化財センター白河館館長、公益財団法人福島県文化振興
財団副理事長を兼務

主な著作 『農耕社会の成立』 岩波新書 2010 年
『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』 新泉社 2008 年
『考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器 I』(共編) 小学館 2003 年

国宝「漢委奴國王」金印の考古学

石川 日出志（まほろん館長・明治大学文学部教授）

【要旨】 天明 4 (AD1784) 年に志賀島で発見された「漢委奴國王」金印は、AD57 年に日本列島の倭奴国が漢・光武帝に奉貢朝賀した際に与えられた印で、日本外交史の幕開けを証明する実物資料として国宝に指定されています。しかし江戸時代以来贋作説があり、2000 年から再び贋作だという主張が出されています。

私は、学生時代を専門としますがこの問題には距離を置いていましたが、思いがけず 2010 年末から「参戦」することになりました。私はそこで、「漢委奴國王」という文字の意味ではなく、金印を考古資料として扱うことに徹して検討を進めました。その結果、法量・金属組成・字形・鉢形・鉢孔形のいずれも後漢初期の製品として全く問題がなく、なおかつ法量以外は江戸時代にはまったく知りえないことから製作は不可能だと結論つけました。本日は、その内容の要点を具体的に紹介します。

1. 「漢委奴國王」金印とは

単品では最も小さい国宝・「漢委奴國王」金印（図 1・2）は、江戸時代の天明 4 (AD1784) 年 2 月 23 日、福岡県志賀島で発見された（図 3）。印面が一辺約 2.35 cm。印面に「漢／委奴／國王」5 字が 3 行に彫られ、鉢は蛇形をなす。文字部が僅む白文で、封泥用の印である。この金印は、亀井南冥が発見直後に、『後漢書』倭伝の記事「建武中元二年（AD57 年）倭奴國奉貢朝賀…（略）…光武賜以印綬」の「印」と判断し、今まで定説となっている。AD 1 世紀中頃の倭国と漢王朝との通交を示す第 1 級の歴史資料として国宝に指定されている。

2. 真贋論争

国宝に指定され、日本史教科書には必ず収録されるこの金印も、江戸時代以来くり返し偽物説が出されている（大谷 1974）。考古学界では、1966 年に岡崎敬が金印印面の各辺が平均 2.347 cm と計測し、後漢代の一寸に合致すると判断し、それ以来誰もこれを疑わない。しかし、最近再び江戸時代製作説が強く主張され、論争となっている。金工技術史の鈴木勉『金印・誕生時空論』（鈴木 2010）は、印面の篆刻技法から江戸時代に製作された可能性が高いとし、古代文学の三浦佑之『金印偽造事件』（三浦 2006）も、当時の学問状況の検討から、亀井南冥が高芙蓉や藤貞幹と偽造に関与した疑いが濃いと推理する。

とある偶然から 2010 年末から参戦した私は、従来の金印研究が印文の読み方に重点を置き、モノ資料としての検討が不十分であることに注目し、考古資料として扱うことに徹した。その結果、以下のように後漢初期の製品であり、なおかつ江戸時代に製作することは不可能だと断定した。江戸時代贋作説はまったく成立しない。

3. 「漢委奴國王」金印の複眼的研究

(1) 尺度の問題 岡崎敬（1968）は、印面一辺が平均 2.347 cm で、戦後に発掘された後漢代の尺の 1 寸と矛盾せず、AD81 年製の建初尺（23.5 cm）の 1 寸に合致することから真印と判断した。しかし肝心のこの建初尺は出土品ではなかった。それ以上に深刻なのは、江戸時代に後漢代の 1 寸は 2.35 cm 内外であることが知られており（中村悟齋：滝本 1914）。それでも、戦後の出土尺を集成すると 1 寸 2.35 cm 内外で（図 4）、金印の一辺長と出土尺の 1 寸と矛盾しない。すなわち、尺度で真贋は判断できない。しかし出土品と矛盾しない点も重要である。

(2) 金属組成 「漢委奴國王」金印の金属組成は、蛍光 X 線分析で金 95.0%・銀 4.5%・銅 0.5% と測定されている（本田ほか、1990）。発掘された金製品の測定値をみると、前漢代・後漢代とも 95~99% であり（図 6）、金印の値に矛盾はない。では、金品位 95% の製品を江戸時代に極秘裏に作れるのだろうか。当時、金は金座という組織で厳重に管理され、不正が発覚して島流し・御家取潰しにあった事例がある（大澤 1999）。市場に流通する金製品としては小判がもっとも品位の高い金製品で、江戸時代前半 85% 内外、後半 56% である（図 5、吉原 2003）。色揚げ手法で表層は 90% 程度に品位を上げることはできるものの、表層わずか 2 μm にすぎない。戦後 2 回、比重法で 90% 以上

と測定されており内部まで高品位なので、小判を鋳瀆し色揚げしたものではない。しかし、そもそも江戸時代に、後漢代の金製品が95%以上の高品位だという事実は知り得ない。

(3) 蛇鉢印の中の「漢委奴國王」金印　農作するとして、江戸時代に鉢をこんな蛇形につくることは可能だろうか。江戸時代に中国から多数の印譜が輸入されており、その中でもっとも評価の高いのが顧従德『集古印譜』(1575年版)である。その中に「晋晉夷率善仟長」鉢印が蛇鉢(虺=まむし)なのは南方の地に蛇鉢が多いからだとあるので、蛇形の鉢があることは分かる。しかし、代表的な鉢形を図示した箇所に蛇鉢はないので、どのような蛇形にすればよいか全く分からず。一般に蛇形と言えばとぐろ形か蛇行形であろう。ところがこの金印は異様な蛇形をしている。亀井南冥がよくもこれを蛇形と判断したものだと驚くほど異様な形状である。

形状が特異な理由を解きほぐしたのが大塚紀宜氏である。大塚氏は、当初駒形(駒鉢)に製作されたのが、のち上部が蛇形に再加工されたと判断した(大塚2008など)。確かに、下半部に駒形の四脚が明顯に残り、前から見ると頭が直立し、上から見ると左右対称形である。蛇形なのは上部だけで、頭が後方を振り向き、尻尾は渦巻形で、胴部も横から見ると前後に螺旋形の蛇形に見える(図8)。さらに表面をよく観察すると、下半部と上半部の表面の状態が異なり、下半部だけに駒駒の体毛を表現した細かい刻線がある。私は大塚説を全面的に支持する。

次に、この金印が駒鉢の再加工品と認めた上で、秦漢魏晋代の蛇鉢印を集めて、時期ごとの変遷が追えるかを検討する。秦漢魏晋代の蛇鉢印を集成すると、形態を確認できる実例が40余例ある。これを形態的特徴から分類する(図7)。I類は印台に蛇体が独立してゐるもの、II類は印台に蛇体がべったり貼りついで一体化したもの。さらにI・II類とも細部形態で細分する。I類のうちA1類は鉢が半環状でその前後に蛇の頭と尾がつくもの(1・2)、Bは頭から尾まで螺旋を描くもの(3)。II類は、AはI・B類に似て蛇体が螺旋→渦形を描き(4・5)、Bは身幅が狭い左右対称形になったもの(6~8)、Cは上から見て螺旋ととぐろ形のもの。「漢委奴國王」金印は1例ながらII A2類に分類する。蛇鉢印は、田字格の有無や字形で秦へ前漢が判別でき、後漢以後は漢・魏・晋の王朝名が記されるものがほとんどなので時代が判別できる。図7の表に各類型と時期の相関関係を整理した。わが金印は、前漢中期のI B類や前漢後期のII A1類と、後漢以後のII B1・2類との中间の形態であり、後漢前期にこそふさわしい。

さらに、これら蛇鉢の諸類型がどのような変遷過程をたどるのかを再検討した結果、とても不思議なことに気づいた。それは前漢代の蛇鉢 I A1類→I B類→II A1類という変遷とはべつに、後漢代に駒鉢を再加工したこの「漢委奴國王」金印の蛇鉢 II A2類が起点となってそれ以後の蛇鉢類型II B1・2類が生まれるのである。II B2類は比較的多数の類例があり、定型化したといつてもよいもので、それはこの金印から生まれた。漢王朝が周辺諸民族を懷柔する冊封制度が整備されつつあるなかで、南方諸民族に与える蛇鉢印の形態はこの金印が起点となつたと判断できる。

江戸時代にはたして、こんなも特異な蛇形で、しかも前漢代と後漢代との中间的な蛇形をデザインすることができるだろうか。現代であれば、考古学および美術史の研究成果から、戦国代から前・後漢代にかけて龍や虎など各種の獸形が頭部を後方に反転し、尾が渦形となる図像が多数確認できることが知られている。後漢代であればこんな蛇形もまったく違和感ないものである。

前記のように、江戸時代には中国から多数の印譜が輸入されたが、そこに駒鉢・蛇鉢の図はない。では、蛇鉢印の実物があった可能性はどうか? 日本に古印の実物がもたらされたのは、1880年に楊守敬が来日した際が最初とされる。江戸時代にはなかったと断定することはできないものの、私が画像を確認している漢魏晋代印は5000例以上あるが、そのうち蛇鉢印は40数例しかない。江戸時代に古印がもたらされたとしてもその中に蛇鉢がある可能性は1%以下にすぎないことになる。さらに、現在知りえる蛇鉢40数例の中にわが金印と同形の実例は一例もない。

(4) なぜ駒駒形から蛇形に再加工されたのか　では、なぜ当初駒駒形に作られ、のち蛇形に改められたのか。この問題を考える糸口として朝鮮半島周辺の印を集めてみた。まず、漢の出先機関である楽浪郡で発見された印をみると、鉢形のほとんどは亀鉢・鼻鉢・瓦鉢・半環鉢・両面印で、漢王朝内の官印・私印の鉢形と共通する(図9-1)。しかし1例のみ蛇鉢がある(図9-2)。「天租蔵君」鉢印で現在の北朝鮮東北→東部域の「天租」・「藏」に与えた印である。さらに東夷諸民族の印を集めてみると駒鉢か馬鉢である(図9-3~5)。これは匈奴・鮮卑・羌・氐など北方か

ら西方の諸民族に与えた印の鉢形と共通する。考えてみれば、倭奴国は東夷の一員であるから、鉢形につくるのはむしろ当然とみるべきなのである。

では、なぜ蛇形に再加工されたのか。残念ながらこれは推定となるが、それは、後漢書に記載されたように、使者から奴國は「倭國之極南界也」という情報が伝えられたために、南方の蛮夷(土蛇)が基本であることから蛇形に改められたであろう。蛮夷印の鉢形を集計すると、写真で確認できるのはすべて蛇鉢であることがこれを傍証する(図10)。

(5) 「漢委奴國王」の字形 この金印の各種検討の中でもっともその製作時期を絞り込めるのが「漢委奴國王」の字形である(図11)。中国では、1980年代までに羅福剛が金印研究を飛躍的に進展させ(羅1987),さらに孫憲祖氏を中心に1990年代以後、考古学的情報や封泥研究も取り入れて鑄印研究の精度を高め、改めて体系化を行った(孫1993・2010など)。孫氏の金印編年を援用して字形の検討を行う。

まず、「國」字はすでに王人聰・葉其峯(1990)が前漢と後漢の違いを示している(図11-A)。「國」の中の「戈」字の第1・3・4画に違いがある。第1画は前漢代では右下がりなのが、後漢代には水平になる。第3画は前漢では曲率が弱く、後漢代には強く曲がるか折れる例が圧倒的。第4画は前漢代は横L字形なのだが後漢代の多くは一直線となる。「王」字(B)も前漢と後漢の違いが明確で、まん中の横線が前漢では上方に偏り、後漢では中央となる。「漢」の「宀」部(C)は、前漢は曲率が弱いのが後漢は直線となり、間の前漢後期から王莽代では下半部が直線度を増す。左上の縦短線が逆L字形になるのは前漢末から王莽代がほとんど。「委」と「奴」は「女」部(D)が見分けるポイントで、「己」形の縦線部が前漢では上方が短く、後漢では下方が同じになる傾向が見いだせる。

「漢委奴國王」金印の5字を見ると(図13),「國」字の「戈」部の第1画はほぼ水平だがかすかに右下がり、第3画は印影では直線に見えるが実際の彫りでは直角に折れ(図2左),第4画は横L字形なので、前漢末→後漢初期の特徴が明顯。「王」字は、真ん中の横線がほぼ中央でわざかに上に偏り、横線の両端が広がるのは前漢末から後漢初めの特徴。「宀」は上半だけがかすかに曲がり、左上の縦線が逆L字形なのは前漢末→王莽代で、下半部が直線的なのは後漢代に特徴的。「委」・「奴」の「女」部は前漢と後漢の中間的。このようにこの金印の5字は、前漢末→王莽代の特徴を持ちながらも後漢代の特徴が現れ始めているので後漢初期と断定できる。「宀」の上部と下部の彫りの拡大写真(図2)をみると彫り痕跡が明顯に異なっており、オザカ1寸四方ながらきわめて微細な彫り分けをしている。

なお、2009年に西安北郊の康家村で発見された新莽代(AD8-23)の封泥群(図12:馬2016)との比較も重要である。これらの封泥群は、「漢委奴國王」金印の約1世代前の文字群で、「宀」・「女」・「國」・「戈」・「王」はいずれもわが金印よりもわずかに古い特徴をもつことが確認できる。この明瞭な差異はきわめて重要である。

4. 「漢委奴國王」金印を江戸時代に譲作することは不可能

以上述べた諸点は相互に全く矛盾がないので私は後漢初期の製品と断定する。しかし、この金印文字の諸特徴を江戸時代には再現できないことも示す必要もある。それには、江戸時代にもっとも信頼された古籍の福徳『集古印譜』に収録された印には、上記の「宀」・「女」・「國」・「戈」・「王」に該当する特徴の文字がないことを挙げれば十分であろう。

しかしダメ押ししよう。図14は、三浦2006が譲作に関与したと推測した藤幹が、『古好日録』で中国の古籍『宣和集古印史』から引用した「親魏倭王」印、卑弥呼が魏から下賜された印である。その「王」字は前漢代の特徴が明瞭で、「魏」の「委」扁下部の「女」も前漢代の形である。「漢委奴國王」5字のうち、現在ではもっとも容易な「王」字でさえ貞幹が却て判別できていない。そんな貞幹がはたして「漢委奴國王」5字を後漢初期の特徴を再現(デザイン)することができたのであろうか。同じく三浦2006が譲与を疑う高芙蓉の篆刻にも、残された印に同種の特徴はまったく見られない(図15)。それでも江戸時代譲作説を主張するのであれば、それが可能であることを具体的に実証する必要がある。

5. その後

以上のように「漢委奴國王」金印を様々な角度から検討を進める中で、ある時、この金印の鉢孔の底が異様に深く、二段に窪むことを知り、そしてこの翌年に製作された「廣陵王璽」金印も酷似する鉢孔形態であることを観察して、

かつて岡崎敬氏が外見の特徴から同じ工房で製作されただろうと推測したことを補強するものだと気づいた(図17)。でもなぜ後漢初期にこんなに鉢孔が深くなるのかまではわからなかった。

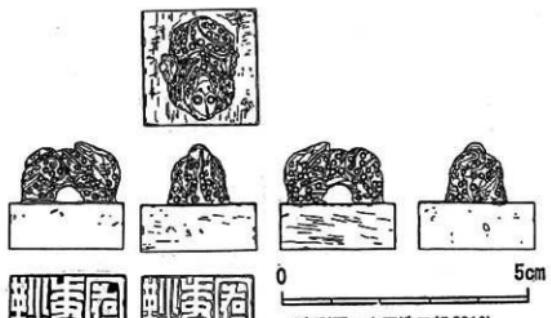
この金印を理解するために、大塚紀宣氏は駒紐の、私は蛇紐の類型化を進めた。しかし鉢印が多く、発掘資料も多くはない。漢魏晋代の印の変遷をもっと詳しく跡付けるには、確かな発掘資料であり、金鉢印も一定数あり、かつ形態的属性が詳細につかみ易い印の検討が望まれる。それには漢魏晋代の官印の実例が多い鉢印が最適であり、資料を集めて鉢印の類型化と変遷を検討してみた(図16)。すると、鉢印は秦代に出現し、前漢代以後多数みられる。前漢代の鉢印は、ミズガメ・クサガメ形で四肢が高く、鉢孔は高く大きい。ところが新莽代になると鉢印がリクガメ形となり甲羅は高いものの四肢は低くなり、それは後漢初期まで続く。印は、幅一尺六寸(約37cm)・長さ二丈一尺(約490cm)の綬を用いて身につけた。その綬を通すのが鉢孔であり、前漢代の鉢印の鉢孔は綬を通すことが可能なのに、新莽代から後漢初期になると鉢孔が著しく狭くなる。そこで外形のデザインは保持しながらも綬を通すことができるようになってしまったのである。また、鉢孔内を観察した鉢印の実例は少ないが、鉢印の直径5mm内外の鉢孔の中をもう少し観察する必要がある。皆さんには笑われそうですが、そんなこともこの金印の研究には必要です。

以上述べてきたように、国宝「漢委奴國王」金印は確かに『後漢書』倭伝が記すように、AD57年に漢の都・洛陽で製作されて「倭奴國」に与えられた印の実物とみなしてよい。

しかし、こうした検討過程を通して、中国古代の璽印を考古学的手法で分析することによって、璽印研究に相当の貢献ができる実感を実感した。そこから最近は、考古学の一分野として「璽印考古学」というジャンルを設けることを提唱するに至った。ある方から頂いた厳しい内容の書簡から始まった「漢委奴國王」金印の考古学だが、今ではその方に大いに感謝している。

【主な参考文献】 五十音順

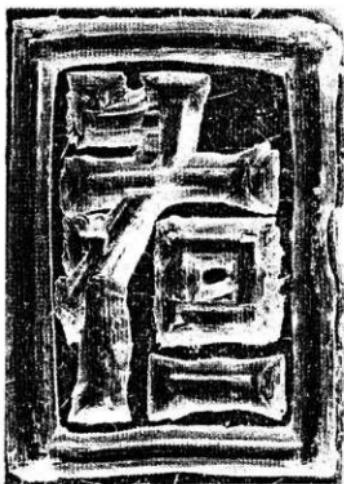
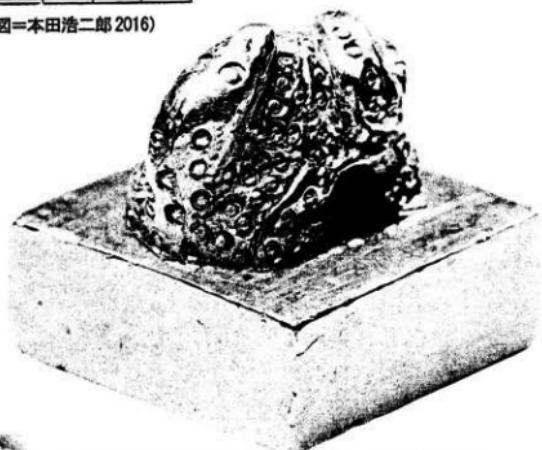
- 石川日出志 2017 「『漢委奴國王』金印の複眼的研究」『第五届“孤山印印”西泠印社国际印学峰会』下冊、和文1544-1551ページ・中文1552-1563ページ、西泠印社出版社
- 石川日出志 2019 「複眼的日本古代学研究—金印をめぐる実践一」『古代学研究紀要』第28号、pp.3-25、明治大学日本古代学研究所
- 石川日出志 2021 「西汉代鉢印の型式学・試論」『古代学研究紀要』第30号、pp.3-21、明治大学日本古代学研究所
- 石川日出志 2022 「新莽魏晋代印・蛇紐の型式学」『古代学研究紀要』31、pp.3-30、明治大学日本古代学研究所
- 大谷光男 1974 『研究史 金印』吉川弘文館
- 大谷光男 1994 『金印研究論文集成』新人物往来社
- 大塚紀宣 2008 「中国古代印章に見られる駒紐・馬紐の形態について」『福岡市博物館研究紀要』第18号、84(1)-71(14)ページ、福岡市博物館
- 岡崎 敬 1968 「『漢委奴國王』金印の測定」『史潤』第100輯(九州大学文学部考古学研究室 1975 『志賀島』) pp.84-92
- 小学館(編・発行) 2017 『燕子花图屏風 金印』週刊ニッポンの国宝 100・vol.3 ★金印の鮮明な写真を収録★
- 鈴木 勉 2010 『『漢委奴國王』金印・誕生時空論—金石文学入門1 金印印章篇一』雄山閣
- 滝本誠一(編)1914 「律尺考驗 并三器說略」『日本經濟叢書』卷2、日本經濟叢書刊行会
- 福岡市博物館(編・発行) 2015 『新・奴国展—ふくおか創世記—』
- 本田浩二郎 2016 「『宦官金印』『漢委奴國王』の鉢孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第25号、pp.66(1)-61(6)、福岡市博物館
- 本田光子・井上充・坂田浩 1990 「金印その他の蛍光X線分析」『研究報告』第14集、福岡市立歴史資料館(大谷 1994 再録)
- 三浦佑之 2006 『金印偽造事件』幻冬社新書
【中文】発行年順
- 羅福顯 1987 『秦漢南北朝官印徵存』文物出版社
- 孫思祖 1993 『西漢官印匯考』上海書畫出版社・大業公司
- 孫思祖 2010 『漢代璽印時代標準品圖鑑』吉林美術出版社
- 丘光明 2012 『中国古印計量史』安徽科学技术出版社
- 馬驥 2016 『新出新莽封泥選』西泠印社



(実測図=本田浩二郎 2016)



(本田 2016 に加筆)
図1 「漢委奴國王」金印



「戈」の第三画に注目（約8倍）



（『新・奴国展』2015）

図2 「漢委奴國王」金印拡大写真 印面 2.347cm四方・高さ 2.236 cm・重さ 108.729g



図3 金印出土地

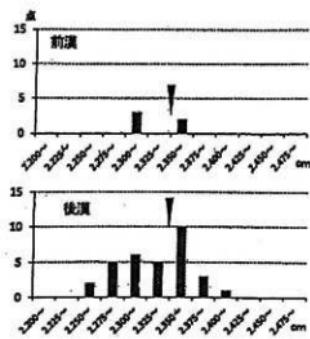


図4 漢代出土尺の1寸(石川2015)



金95.0%・銀4.5%・銅0.5%

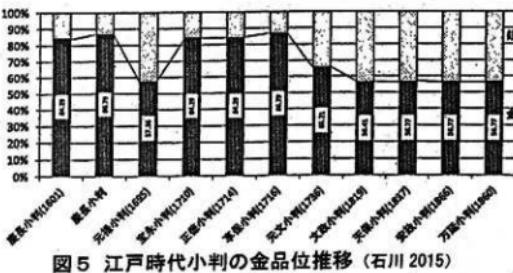


図5 江戸時代小判の金品位推移(石川2015)

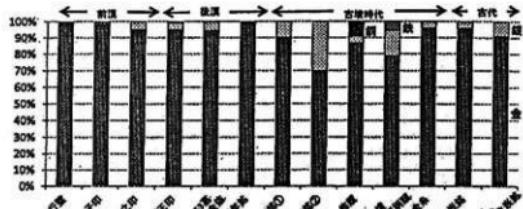
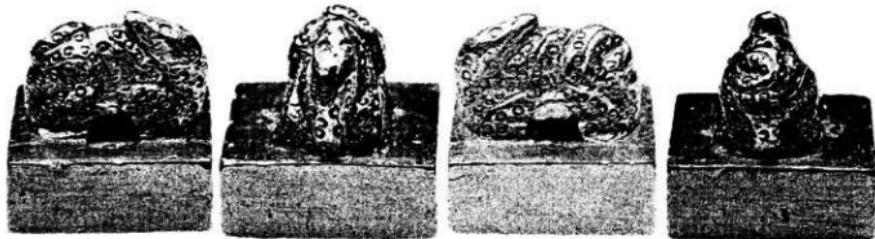


図6 遺跡出土金製品の時代別金属組成(石川2015)



図7 蛇鈕印の分類(類型)と帰属年代: わが金印は後漢初期とみるべき



蛇形なのは紐の上部だけで、下半部は駝紐の四枝が残る（『新・奴國展』2015）

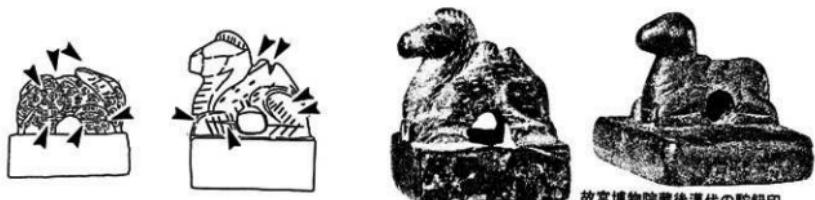


図8 「漢委奴國王」金印は初め駝紐として製作されてのち蛇紐に再加工された



図9 東夷の印：1・2は楽浪漢墓出土。樂浪漢墓の印は龟紐など漢王朝内の紐形と同じだが「天租君」銀印だけ駝紐

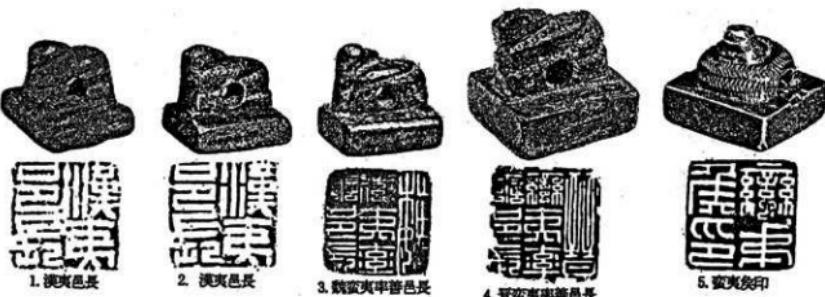


図10 後漢魏晋代の蛮夷印の多くは駝紐

前漢 33 35 34 36

後漢 172 184 187 175

188 176 185 186

(王・葉 1990)

A : 國

平的國丞

BC127-AD8

卑湊國丞

BC31-AD8

金製國丞

AD1-8

宣善侯國性丞

AD9-23

征羌國丞

AD35~

嘉慶國財

AD37-62

西漢早～中期

西漢中期

西漢晚期

西漢晚期～

東漢早期

東漢早期

東漢晚期



B : 王

西漢中期

西漢晚期

新莽

東漢早期

東漢早～中期

東漢晚期



西漢早期

西漢中～晚期

西漢晚期

東漢早期

東漢晚期

C : 漢・少



D : 女

図11 國 (A), 王 (B), 漢・少 (C), 女 (D) 字形の時期別変異

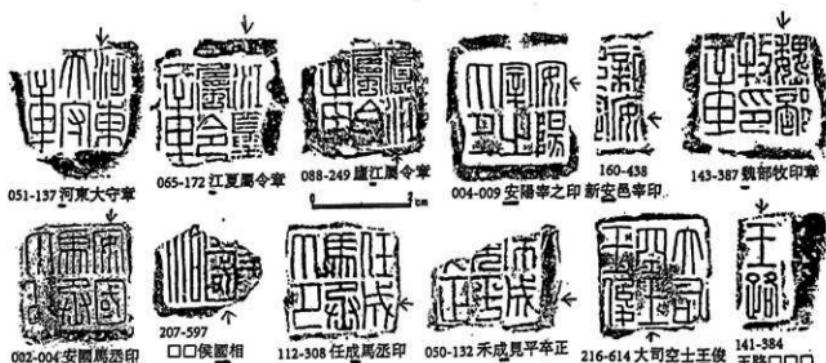


図 12 王莽代（新：AD. 8-23 年）封泥の「辶」、「女」、「國」・「戈」、「王」（馬 2016 より）

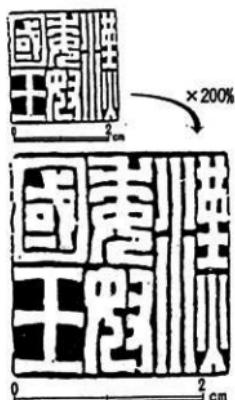


図 13 「漢委奴國王」金印

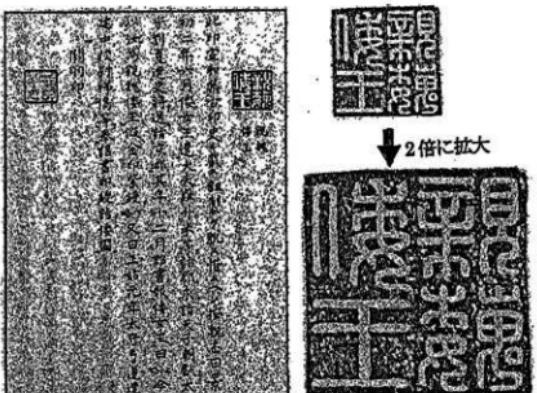


図 14 三浦 2006 が眞作に関わったと推定する藤貞幹は偽物「親魏倭王」を見抜けなかった



図 15 江戸時代の高芙蓉の篆刻には金印の「辶」の特徴はない

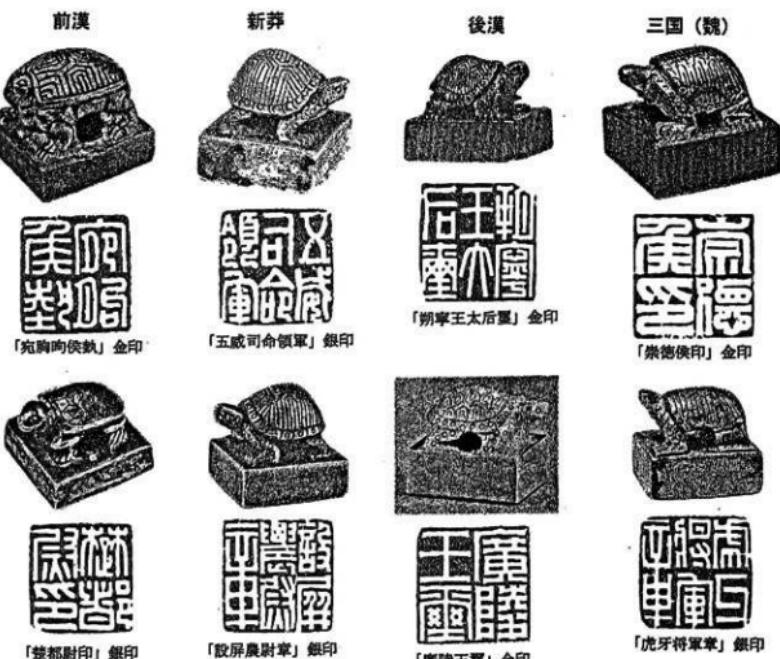


図 16 龜鈕形態の変遷 (孫慰祖 2010『歴代璽印 断代標準品図鑑』吉林美術出版社より作成)

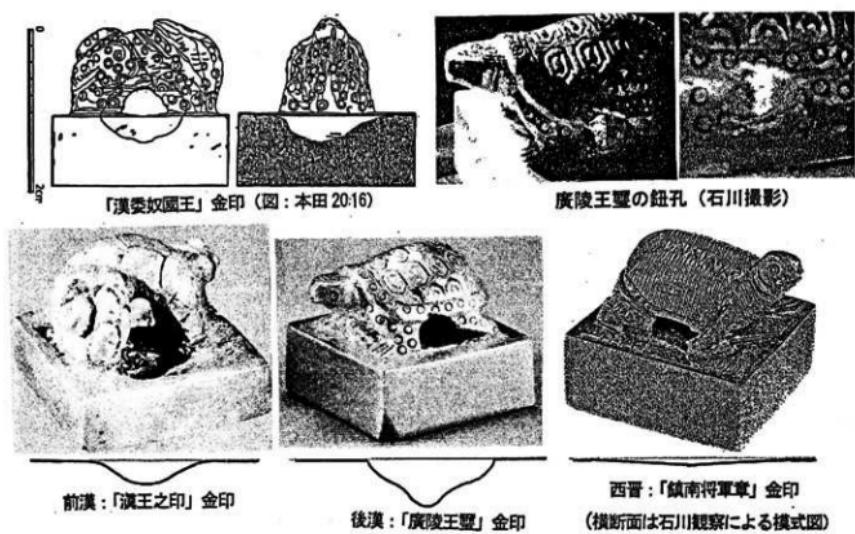


図 17 鈕孔下面の瘤みの変遷 龜鈕の形態変遷と対応する